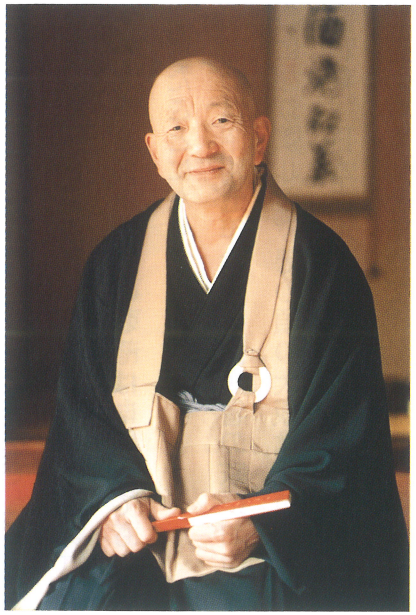
円覚

令和2年 うらぼん号　330号

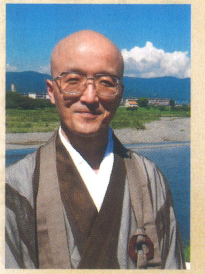
－追悼－

足立大進老師



足立大進老師の教え

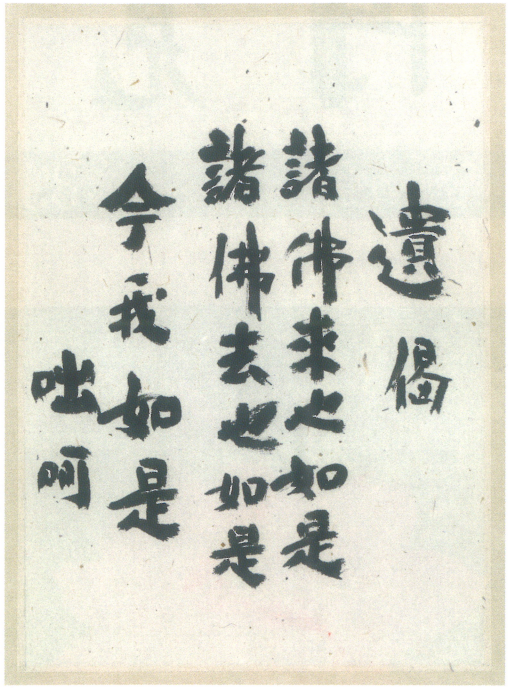
管長 横田南嶺



四年に一度しかない閏日（うるうび）という二月二十九日に、円覚寺の前管長足立大進老師がお亡くなりになりました。八十七歳でした。禅僧の死を「遷化（せんげ）」と申します。亡くなったのではなくて、教化（きょうけ）の場を遷（うつ）すという意味です。

脳梗塞を患われてから療養中でありましたが、円覚寺山内の臥龍庵（がりょうあん）において、二十九日の午後一時半頃、静かに息をひきとられました。

禅僧の死を「示寂（じじゃく）」とも申しますが、まさしく「寂」を「示」されたご最期でした。



円覚330号目次

足立大進老師　遺偈 …… 表紙II
足立大進老師の教え／横田 南嶺 …… 1
足立大進老師を偲んで／大下 一真 …… 10
冥黙～足立大進老師の戒め／衣斐 弘行 …… 14
俳句的死に方（三）／長谷川　櫂 …… 18
中世文学と禅（三）／田中 徳定 …… 24

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

※桜井竜生先生は今号休載です

私は、老師の五十代の終わり頃から、実に三十年近くにわたってお仕えさせてもらってきました。今私は五十五歳ですので、実に人生の大半をこの老師のおそばに置いてもらってきたことになります。

老師は昭和七年大阪の歯医者の家にお生まれになりました。その頃の大阪は「煙の都」と言われ、日本でもいちばん空気の汚い所とまで言われていたそうで、幼い頃からお体がお弱かった老師は、とても大阪のような所では育たないといわれ、父方の祖母の里に当たります兵庫県の田舎で、育てられることになったそうです。老師がまだ四歳の時でした。体は弱いけど、空気のよい田舎なら育つかもしれないというおやごころでもあったのでしょう。田舎で幼稚園までを過ごし、七歳で小学校へ入る時に、もう大丈夫だろう、ということで、大阪へ帰りました。ところがすぐに体調がすぐれなくなり、結局一学期だけ大阪の小学校へ通い、二学期からまた元の田舎へ戻られたようです。

老師にとって人生の転機となったのは、昭和二十年の春のことでした。今度は大阪に帰り高槻の中学から当時の大阪医専へ入るコースを歩むつもりでいたそうです。ところがその頃、大阪大空襲がございました。記録によると二百七十四機ものB29が三時間焼夷弾を落とし続け、大阪の中心部はほとんど全燃してしまったのです。老師が中学を受けるための受験票が、このとき家もろとも燃えてしまったのでした。中学受験のために大阪へ帰る支度をしている老師に両親から「ヤケタカエルナ」という電報が来たそうです。やむなく田舎の中学に入ったのでした。ところがその中学校は隣の郡にあって、祖母の実家からは通学できません。そこで遠縁の人に頼んで、その檀那寺へ下宿させていただくことになったのでした。

田舎のお寺に下宿しましたが、たまたまその寺に吉川英治作の『宮本武蔵』六巻があり、暇さえあれば老師はそれを読んでいたそうです。剣豪宮本武蔵をもってしても頭の上がらない人物が沢庵和尚であり、愚堂和尚であるのです。しかも沢庵和尚は同じ但馬の出身なので特に親しみを感じ、いつしか禅の世界に惹きつけられたのだとよく仰せになっていました。

そこで人生の一大事が訪れました。初めはお寺に下宿していたそうですが、戦後の日本はだんだん食糧事情が悪くなっていき、それはお寺も例外ではなかったのです。下宿料を五円か十円値上げしてほしい、さもなければお寺に養子に来てもらいたいと二者択一でせまられたそうです。当時老師の他に兄弟三人のいた五人家族で、しかも焼け出された後ですから、御家族はとても下宿代の値上げには応じきれない状態だったらしいのです。そこで老師はお寺の養子に入ることになったというのです。

この話をなさる時に老師は、いつも多くの方はご縁があって坊さんになるけれど、私はごえん(五円)が足りなくて坊さんになったのだと言っては人を笑わせていました。しかし、笑ってはいられない悲しい話であります。

老師は、成績がご優秀であられて、本当は京都大学へ行きたかったそうです。そのつもりで勉強もしていたのですが、寺の檀家総代が寺の跡取りになってもらう為に本山の学

校、花園大学に入れるのがいちばんいいということで京都の花園大学に入学されました。

そして大学四年の時、一人の親しい女性が亡くなるというご体験をなさいました。それ以前に老師の従兄の方も結核で亡くなり、小学生の頃の担任の先生も戦死されるというご体験を経て、老師は否応なく無常感に追いつめられたようです。

そのころちょうど田舎の寺で、学校を卒業したら帰ってきて高等学校の先生でもやってもらいたいという話があったのですが、田舎の和尚の反対を押し切っても僧堂へ行って修行しようか迷っておられたそうなのです。

そんなある日、大学四年の秋、寄宿舎の部屋でラジオのスイッチを入れると尾崎咢堂翁のお葬式の放送に出くわしたのでした。尾崎咢堂翁とは、尾崎行雄のことで「憲政の神様」や「議会政治の父」と呼ばれ、世界連邦の運動などを熱心に提唱されていた方です。老師も尾崎咢堂翁の思想に共鳴されていたこともあって、その放送を聞き続けました。

この葬式の導師が、当時の円覚寺派管長、朝比奈宗源老師だったのです。禅宗のお葬式では、引導の香語を唱え一喝をくだします。ラジオから聞こえてきた朝比奈老師の一喝に老師は魅せられて、ようし、円覚寺へ修行に行こうと決められたというのでした。そして昭和三十年に円覚寺にお越しになって、朝比奈老師のもとで御修行になり昭和五十四年に朝比奈老師がお亡くなりになるまで二十四年間おそばにお仕えされたのでした。そしてその後円覚寺派の管長になられたのでした。

その途中昭和四十四年に、朝比奈老師が体調を崩されて、老師が師家代行として、僧堂

那智の滝にて

の雲水の指導にも当たられていました。その頃の師家としての厳しさは、知る人ぞ知るであります。

昭和五十五年から、平成二十二年まで実に三十年の長きにわたり、円覚寺派管長として私たちをお導きくださいました。

老師のお師匠さまにあたる朝比奈老師は、つねに仏心ということをお説きになっていました。「人は仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引き取る」とよく説いておられます。『仏心』という題名の著書もございます。

それに対して足立老師はあまり仏心という言葉をお使いにはなりませんでした。おそばにお仕えしていて、ある時老師は私に、「仏心という言葉を使うと、なにかそのような特別なものがあると勘違いされることが多い、そこで自分はあえて仏心とは言わずに、多く

のご縁とおかげをいただいているのだと説いて、仏心の世界を示すようにしているのだ」と仰せになっていました。

そこで老師は、常にお互いは、数えきれないご縁とおかげをいただいて生きているのだと説いておられました。そしてそのご縁も決して順縁ばかりではない、いわゆる自分を楽しませ、快くしてくれるご縁だけではないことを強調されていました。老師の場合ですと幼くして養父母に預けられましたが最後までなじめなかったと仰せになっていましたし、空襲の為に大阪の学校を受験できなかったことも、更に自分の行きたい大学に入らせてもらえなかったことも、それら自分には不仕合わせに思えたことも、順縁であろうと逆縁であろうとすべて関わりあって、その関わりあいの上で、今ここにいるのだと説いておられました。ご自身のご体験に裏打ちされたお話ですので、拝聴するたび毎に心打たれたものでした。

そこで老師は、「あの時にああしてくれればよかった、このときになぜこうしてくれなかったと悔やむのではなくて、全てご縁なのだ、仏様のご縁なのだ、仏様の導きによって今こうしてあると受け取るのだ」とお教えくださっていました。

そのように、ひとたび限りないご縁に生かされている自己に目覚めてみると、実は自己ばかりでなく、この世のあらゆるものすべてが同じく不思議なご縁に生かされているというのが、仏陀の悟りであると説いてくださっていました。仏心の世界につながるのであります。

そうして自己の生命の尊厳に目覚めたならば、更に一歩進んで、あらゆる命に対して畏れ敬う心を持って、その信念から溢れ出る慈悲の行がなければならないと示してくださいました。自ら覚り、そしてその有難さが分かったら、今度は一人でも多くの人にこの命の不思議に気づかせ、覚らせようという心、他を利するという利他行がそこになければなりません。自分の生命が限りないご縁であるのだという生命に対する畏敬の念から、何とか少しでもより豊かに幸せな世界を築きたいという誓願を持たなければ、真箇に目覚めた人とは言えないのだと教えてくださいました。そうして老師は、多くの人たちに分かりやすく教えを説き続けてくださったのでした。

三十年来おそばにおいていただきながら、老師のお教えの何分の一も身についていないと、今も慚愧（ざんき）します。

平成十一年に円覚寺の僧堂師家を私に譲られて、山内の傳宗庵（でんしゅうあん）に閑居されていた頃は、畑仕事に精を出され、多くの信者さんたちに囲まれて、お幸せのようにお見受けしました。

更に平成二十二年に管長職を私に譲られて数年後に、円覚寺山内の臥龍庵にお移りになりました。

禅宗の修行では、師弟関係が厳しいと言われています。「上士は仇に嗣（つ）ぎ、中士は恩に嗣ぎ、下士は勢いに嗣ぐ」などという古い言葉もあって、師と弟子との関係は仇敵（きゅうてき）のようなものがよいと言われているのです。

私が師家になっても、管長になっても、お伺いするたび毎にお小言を頂戴し、ご叱正を賜りました。

ときには無理難題を仰せつけられることもありましたが、人生は自分の思うようにはならないことを、身をもってご教示いただいたと

出棺

思います。それらすべてがご縁とおかげとなり、今の自分となっているのだと受け取らねばならぬと、老師のお教えを噛みしめています。

禅学においても修行においても共に抜きん出た老師でありました。管長三十年を全うされた、円覚寺にとって偉大なる禅僧でありました。

唯一、思うにまかせなかった、心残りがあるとすれば、私如き愚物に後を託さねばならなかったことでありましょう。私には今もなお老師のご叱声が耳に響いてきます。

通夜の晩と、その前日の晩は、一人でご遺体のおそばに布団を敷いて、ご遺体をお守りさせていただきました。

修行僧の頃は、よくお供をさせていただいて、いろんな旅館や宿で休ませていただきました。同じ部屋でお休みさせてもらうことも

ありました。老師よりも早く起きると、老師を起こしてしまうので、憚られます。かといって老師が起きられてから、起きるようでは、これまたお叱りを受けます。そこで起きていながら、布団のなかでじっとしていて、老師のお目覚めになるのを待つのでした。

寝返りを打ってお目覚めだという、まさにその瞬間にこちらも起きてご挨拶をして、お手洗いに行かれている間にお布団をあげて、お茶の支度をするのでした。

ホテルで、部屋が別々の時には、更に気を遣いました。隣室で、ひたすら息をひそめて、物音のするのを待ちます。お目覚めの気配を察すると、お部屋にうかがいました。このような機微を察することが大切でした。

思い起こせば、お元気な頃には、僧堂の餅つきによくお見えくださいました。老師が餅を搗かれ、私が手返しをし、私が搗いて、老師が手返しをするなど、よく勤めさせてもらいました。二人の呼吸が合っていると、言ってくださった方がいましたが、こちらはそんな意識をしていないのですが、長年お仕えしてきたからなのでしょう。

ご遺体のおそばで布団を敷いて寝ていると、老師がお目覚めになるのではないかと気になって何度も目が覚めました。未明、いつしか布団のなかで、お目覚めを待っている心境になっていました。

もちろんのこと、老師はお目覚めになることはなく、そぼ降る雨の中、静かに夜が明けました。

これからは、せめて凡骨にむち打って、老師の教えを胸に刻んで更に精進してまいることをお誓い申し上げるばかりなのであります。